

最悪に対処して最善をつくす

今村 均



不敗の名将・昭和の聖将と呼ばれた今村 均大將は、明治十九年（一八八六年）仙台に生まれました。寝小便たれと病的な居眠りの少年が、軍人の道を選び、短所を克服して努力精進しやうじんを重ね、人格を磨き上げていきます。

昭和十七年、ジャワ派遣軍司令官はけんぐんとしてジャワ島を占領、敵軍だったオランダ人にも、現地民のインドネシア人にも、温かい占領政治を行い、神のごとく尊敬しほ思慕しほされました。すばらしい実績を残し、同年十二月にはラバウル方面軍司令官に転じます。

このとき今村は宮中に召めされ、特別に天皇陛下から「なんとかがダルカナル島

の將兵を救出してくれるように」との内命ないめいを受けました。当時ガダルカナル島では、わが軍は食料の補給が続かず、言語に絶した苦戦で、全滅ひんに瀕ひんしていました。任地のラバウルに急行した今村は、海軍の山本いそく五十六連合艦隊司令長官と協力して、一万七百人の將兵を、餓死がし寸前の島から助け出します。アメリカ軍はこれに全く気付かず、奇跡の撤収てっしゅう作戦といわれたほどです。

その後、今村はラバウルを文字どおり難攻不落なんこうふらくの地下要塞ようざいに作り上げ、食料自給体制までも確立したので、アメリカ軍はついにラバウル攻撃をあきらめたといえます。相手につけこむ隙すきを全く与えなかったのです。

終戦後、いわゆる戦犯として、巢鴨刑務所に入りましたが、今村は、ラバウルの旧部下らが戦犯として収容されているマヌス島へ自分を送り返すよう占領軍に幾度も要請し、その態度にマッカーサーGHQ司令官は「私は、今村将軍が旧部下戦犯と共に服役するため、マヌス島行きを希望していると聞き、日本に来て以来初めて武士道に触れた思いだった」と言い、要請を許可し今村は同島に戻りま

した。旧部下を含め四百人の人々は涙を浮かべ今村を迎えました。今村は苦難を分かちあつたのです。

部下とともに現地刑務所で十年の獄中生活の後、自宅の庭に三畳ほどの謹慎小屋を建て、そこに籠こもって戦没者の冥福めいふくを祈りながら過ごしました。

※今村均（いまむらひとし・昭和四十三年～一九六八年）没・八十二歳

◎ 今村均大将の大活躍に驚きました。「道徳・徳性・人徳・美德」を持つ人物だったと確信をしました。

◎ 旧部下の戦犯と共に服役を希望するとは、「真の大将」は今村均です。

(M生)